

或る少年兵の記録

埼玉県 満尾勝美

私が九州島原市のとある高等小学校改め国民学校を卒業したのは、昭和十八（一九四三）年三月二十日であった。その前年の卒業式には、在校生を代表して「輝く戦勝の春」という送辞を述べたが、一年経った今、さらに軍国色が強まっていた。時の校長も退役陸軍中尉で「天皇陛下の御為に」というのが口癖の大変気骨ある人であった。

松平賞をもらいクラストップで卒業した私にとって、その先の進路の選択を誤れば「鼎の軽重を問」われかねない危機感があった。担任の先生は、師範学校の推薦入学を熱心に勧めて下さったが、当時成績の良い連中は予科練を志望したり、満蒙開拓義勇軍を志すなど軍関係を志す人が多かった。さりとて私の場合、予科練を受験するには小柄すぎて、身長・体重共にその資格がなく、小さな胸

を痛めていた。

そんな時ふと通りかかった映画館に、航空兵の訓練の模様をあしらった大きな看板と、所狭しと貼ってあるポスターが目に残った。興味を覚え、小遣いをはたいて中に入った。

航空兵の厳しい訓練、食堂での食事、内務班での楽しい会話などがあり、中でも卒業記念の郷土への訪問飛行、そして郷土の人々に翼を振って別れを告げるシーンなどには心が強く惹かれた。映画の最後には、西の空が茜色に染まる夕暮れをバックに、「夕空晴れて秋風吹く。月影落ちて鈴虫鳴く。思えば遠し故郷の空。ああ我が父母いかにおわす」と云うスコットランドのメロディーが流れ、数人の航空兵がそれに唱和するというシーンで映画は終わっていた。

賛軍調の中に、ある種の寂寥感があり、迷える子羊にとって大きな感銘を与えた。帰宅して母親に「少年航空兵を志願させて欲しい」と話したら、女手一つで六人の子供を育てた気丈な母に「何

で志願までして死に行くのか」と涙を流しながら叱られた。

困り果てた私は、少年通信兵なら多少危険性が少ないのではないかと考え、四月下旬に大村へ受験に行った。旬日を待たず、十二月一日入校の連絡があった。入校までには相当の期間があり、佐賀県波佐見にある青少年訓練センターに三週間の予定で入所した。共同生活や人間関係を少しでも学ぶのが目的であった。

昭和十八年十一月下旬、戦運が慌しく動く中、母親代わりの姉に付き添われて上京し、東京東村山にある陸軍少年通信兵学校に入校した。第十一期生であった。学校は武蔵野の野原の中にあった。広大な広さであった。二百人の中隊に編成され、私は第五中隊（月隊）に配属された。また、十六人ごとの内務班に分かれた。

武蔵野の原野は広く、十二月の寒風は九州と違い寒く、冷たかった。寒風吹きすさぶ中、一日の

訓練を終える。夕食後の武器の手入れ、冷たい真水を使つての洗濯。一週間も過ぎると、手は霜焼けとあかぎれになった。疲れた身体を硬いベッドに沈めると、やがて消灯の時間になり消灯ラッパが鳴り響く。例の「新兵さんは辛いもんだねー。また寝て泣くのかねえー」その音の響きを聞くと、もの悲しくなり、十五歳の頬に涙が流れ落ちた。内務班長の渡辺軍曹が巡回して来て「満尾、暑いのかなあ」と言つて私の頭を撫で回すのが何日も続いた。

一カ月もするとすべてに慣れてきた。三カ月目になると歩哨勤務が始まった。完全武装し、肩に銃剣を担いで学校の外堀の周りを警護して歩く。深夜終電車の音が遠くに聞こえた。あたりは漆黒の闇だけだ。聞こえるのは自分の足音だけである。二時間経つと交代がやってくる。「異状なし！」で交代し、内務班に戻つて床に就く。朝六時になると起床ラッパが鳴る。

七月になるとみんなが待ちに待った富士登山と遊泳演習だ。用意した二足の草鞋を腰にぶら下げ出発した。富士山は中腹で仮泊し、翌朝早く頂上へ登ってご来光を拝み、用意して来た草鞋を軍靴の下に履き、砂走りで「滑るがごとく、走るがごとく」して楽しんだ。その夜は麓の滝が原の宿舎に泊まり、翌朝、伊豆半島東側の網代海岸で遊泳演習が始まった。海で育った私は、水を得た魚のごとく泳ぎまくった。

十月初めになると、各学校とも生徒の三分の一を卒業させると云う噂が流れた。十月下旬にその名簿が発表された。私、満尾勝美の氏名もあった。

「十一月七日に、南方方面に派遣されるから家族に連絡するように」と付記されていた。東京も時には空爆があり、「九州から来てもらえるかなあ？」と、一抹の危惧はあったが、九州から姉が別れに来てくれた。姉に感謝しつつ私達五十人は星野曹長に引率され、三重県の四日市飛行場に来た。

他の卒業生は他校の人達と一緒に品川に集結し、輸送船で南方方面に向かうと言うことであった。私達は双発高等練習機三機に分乗し、途中九州の新田原・沖縄に立ち寄り、台北に到着した。

台北は別天地であった。戦争をしている「我が国」にもこういう所があったのかと我が目を疑った。食事は食べ放題、果物・甘味品も豊富だ。まさに天国であった。早速みんなが下痢を起こすなど笑えぬ珍現象も起きた。一週間くらい過ぎた頃、引率者の星野曹長から招集がかかった。十五人を沖縄に派遣すると言って、その名前が発表された。二日後に再び招集がかかった。「先日発表した中に台湾出身者が一人いる。せつかく郷土に帰って来たのに沖縄に派遣するのは忍びない。誰か代わりに行ってくれるものはいないか」との話であった。誰もが無言であった。

「どうだ、代わりに行ってくれる者はいないか」と、再度話をされたので、「私が参ります」と手と

挙げた。「満尾、行ってくれるか。よし、二・三日の間に航空券を用意するから準備しておくように」と言われた。

三日後に沖繩に渡った。球第一八三〇部隊に配属された。私は、分隊を転々として、南大東島や周辺離島からの通信傍受に回った。その頃の沖繩は、十月十日に那覇に大空襲があったそうだが、比較的のんびりしていて、B 29 が飛来しても皆が外に出て手をかざして眺めるという光景があった。あの飛行機は、おそらく次の爆撃地を探しに偵察に来たであろうに！

三月になると様相が「がらり」と変わって来た。艦載機のグラマンが連日飛来し銃撃を、そして爆撃を繰り返すようになった。月末になると沖からの艦砲射撃も加わって来た。私たちは軍司令部にある首里城の中腹に横穴を掘り、入り口にはトン張りの戸板を立てて爆風除けにした。その頃は、有線の「六号有線機」を持ち込み、司令部との連

絡に使用していた。空襲や爆撃を受けるたびにその黄色い有線は破損した。

グラマン機の銃撃の最中であろうとも、首里城の城壁に這いつくばって切断個所を探し修理した。艦砲射撃は重苦しい音をたて、いっどこから飛んでくるかわからぬうちに着弾して来る。昨日人と挨拶を交わした場所は、今日には跡形もなく破壊されていた。

その頃になると、アメリカ軍が西海岸に上陸したとの噂が流れた。ちょうどその頃の私は、胃腸を悪くし食べられない、下痢を繰り返すという日々を送っていた。ある日、用を足しに外に出て麓を見てみると、アメリカの戦車が火炎放射器で辺りを焼き尽くしているのが見えた。

その夜、撤退命令が出た。痩せ細った身体で背囊を背負い、両手にいっぱい荷物をぶらさげて三〇〇メートルも進もうとするが、もういけない。身体に力が入らない。足が上がらない。

「弓取分隊長、私にはこれ以上無理です。私に

構わず先に行ってください」「うん、駄目か。よし、この場所を動くな。死ぬのは駄目だ。必ず迎えをやるから動くなよ」と、言い残して行ってしまった。座り込んで三〇分位経った。撤退用の荷物を満載にしたトラックが、私の前で止まった。手を借りて満載した道具類の隙間に乗せてもらった。

ちょうどその頃の沖縄は、梅雨・雨期に入っており、トラックが凹地の水溜りに入ると車輪がスリップする。するとそこに負傷した日本兵何人かが「助けてくれ」と言ってスリップする車輪に手をかけようとして近寄って来る。助手席に座った兵士が「危ない、手をかけるな！　どこの部隊だ」と、言いながらトラックは動き出す。二十分位して十台位の本体と合流した。

三十分位走ったと思った頃、追撃法の集中砲火を浴びた。腹に力を入れて必死の形相で荷台から飛び降りた私は、車輪の陰に身を隠した。しばらく

くすると砲撃が止んだ。あたりを窺いながら身を乗り出して見ると、トラックの運転手も助手席の兵士も即死していた。私と一緒にトラックの荷台に乗っていた人は、破片で左脇を深ぶかとやられていた。救急用の三角巾がすっぽり入ってしまったほどの大怪我を負っていた。動くトラックに乗せてもらい、夕刻、与座の濠に入った。

怪我人を治療室に連れて行き、手当てをお願いした。その頃の私は血尿が出る始末で、尿意を催した時には濠の外に出てと思いながらも間に合わず、濠の中で用を足す状況であった。

一週間もすると「ここも危ない」ということで、三々五々、島の南端にある喜屋武岬に退避することになった。「お米」を雑囊に入れてもらい、飯盒・マッチ・手榴弾一個をもらい出発した。これからは、生きるも死ぬも己れ次第である。二日目に喜屋武岬に到着した。喜屋武岬には、既に到着した日本兵がかなりいた。南端には格好の岩場が

あり、その下には紺碧色をした海が広がり、実に綺麗であった。

岩場に着いて二日目の夜、二人の当番兵を伴って偉い人がやって来た。十円札を出しながら「食べるものを少し分けてもらえませんか？」と言われた。私は、「お金はいりません」と言って、けなしの「お米」を少し差し上げた。

三日目の夜、元気な人は「切り込み隊」に参加して欲しいとの「触れ」が廻って来た。四〇分くらいすると、それに参加した人たちが帰ってきた。彼らが言うのには「アメリカ軍の宿舎にはピアノ線が張り巡らされている。それに触れると照明弾が上がり、そこに集中砲火が浴びせられる仕掛けになっている。簡単には近づけない」との話であった。

一方、筏を組んで櫂を用意して、夜陰に乗じて沖に出て、あわよくば黒潮に乗って沖縄脱出を試みたが願い叶わず、二時間余りで引き返して来た二人組もいた。彼らは「潮の流れが悪い。夜が明

けると米軍に捕獲されるか攻撃を受けることになりそうなので断念した」と言う。

四日目になると、アメリカの掃海艇が来て、宣伝を始めた。「ニホンゲンのミナサン、日本軍の皆さん、アナタたちハ勇敢にタタカイマシタ。モウムダナテイコウハヤメテ、メイヨアル降伏ヲシテクダサイ」と、繰り返し放送を続けた。私たち日本軍には、「生きて捕虜の辱めを受けるよりも、死して名誉を守る」という不文律があつた。翌日も掃海艇が来た。放送を始めると岩場の上の方から軽機関銃で掃海艇に向かって撃つ人がおり、「ウツトアブナイ。撃つと危ない」と叫んで、掃海艇は沖の方に遠ざかって行つた。

翌日から様相が一変した。掃海艇が変わって水陸両用戦車がやって来て、戦車砲で岩場を攻撃、破壊し始めた。もう岩場は危険だということで、上のほうにあるアダンの木の中に身を潜めた。

アダンの林に身を潜めた二日目に「全軍摩文仁

に集合せよ」との命令が下ったらしいとの情報が流れた。その真偽を確認する術もないまま、昼間にも拘らず、摩文仁へと行動を起こした。海岸線に沿って低い姿勢で歩き、時には、匍匐前進を繰り返し、前へ前へと進んで行った。しかし米軍の反応は早かった。複葉偵察機「通称トンボ」が飛来し、低空で旋回し続けた。やがて周辺の艦船からの砲撃が始まった。砲撃の焦点は私達の前に集中していたが、いつこちらにくるかわからぬ不気味さがあつた。

私達は前進も後退もできず地面にはいつくばっていた。砲撃の途切れた夕刻、喜屋武岬に引き返した。海岸に出て水汲み場で水を求め、今日はお米がないのでサツマイモの茎を塩水で茹でて灰汁を抜き、カタツムリ等を食べた。粗食が効果あつたのか血尿は止まっていた。先月ここで、水・食糧を狙って日本兵同士が銃で撃ち合うシーンもあったが、人間極限の状態に追い込まれると、一人ではできなくとも集団になると何をやらかすかわ

からないなあと感じた。

いつもは、暗くなると米軍宿舎の辺りをうろついて食べ物を探しに歩くのが日常的であつたが、その日はアダンの林に帰って休んだ。

あの斬り込み隊と掃海艇に向けての発射事件の後は、アメリカ軍の掃海作戦に拍車がかかった。アダンの林も火炎放射器で焼き払いにやつて来た。そこに潜んでいた人達は、火の来ない方へと逃げ回った。しかしすぐに逃げ場を失った。私は、ほんの先程まで燃えていたアダンの林の中にある岩陰に身を潜ませた。手榴弾を握り締め、「見つかったらそれまでよ」と観念して噴き出す汗と熱さに耐え、耐え忍んでいた。アメリカ兵が近づいて来て、しばらく岩の周りをうろついていたが、やがて引き上げて行った。それでもしばらく動かず息を潜め、夕暮れ時までじっと我慢していた。

岩陰から出て見ると、アダンの木の跡はなく、全くの焼け野原になっていた。生き残った人達が

数人いた。「暗闇に乗じて敵の哨戒線を突破し、北に向かって行こう」と歩きだした。五〇メートル位の間隔を取りながら、私は最後尾を歩き始めた。一時間も歩くとそこはまさしく漆黒の闇夜だった。前を歩く人の足音だけが頼りだ。いつしか前の人以外は判らず、他を見失ってしまった。前を歩く人、この人が現地入隊した宮里さんであった。

はぐれてしまった私たちは、「これからは二人で行動しよう」と言って、行動し始めた。いや二人の逃避行が始まったのだ。二人で歩いた。夜が白みかけて来た。「今日の寝ぐら」を探し始めた。濠を掘った跡があった。入り口を探してみた。少し掘って滑り込めば何とか入れそうだ。やっと思いで滑り込んで中に入ってみると、中には十数人の人達が隠れていた。みなさんに挨拶して一緒に住むようになった。

昼間は寝る。夜が来ると濠を抜け出し、弾痕跡に溜まった水を汲み、涼を取りながら炊事をした。

明けの明星が出る頃には、濠の中に入って身を隠すというのが生活のパターンであった。

何日かが過ぎ、いつものように夜が来て濠の外に出た。雨がしとしとと降っていた。嫌な雨だなと感じながら濠の中に戻った。翌朝十時頃になると何か怒鳴る声が聞こえた。「ニホンヘイデコイ。デテコナケレバ毒ガスをツツコムゾ!」という内容であった。みんなで濠の奥に避難した。間もなく「ドカン」と大きな音がした。私は意識を失った。

「今、何時だ」「午後五時だ」という声に意識が戻った。何か背中あたりにブヨブヨする。半身を起こしてみると倒れた人のお腹である。何人かが倒れて死んでいた。通路の水溜りに倒れ、唸り声を発する人、口から泡を吹き出している人がいた。先程時間のやり取りをしていた人たちは、既にいなくなっていた。

宮里さんが意識を取り戻して立ち上がった。二

人で濠を出た。滑り込んで出入りしていた小さな穴は、爆破により直径三メートル位の大きな跡に変わっていた。二時間か三時間くらい歩いただろうか。疲れが出てきた。どこか寝る場所をと思い、探してみると小高い笹畑があった。今夜の「寝ぐら」だ。

夜が明け、やがて日が高くなり笹畑の隙間からあたりを見ることができた。日焼けしたアメリカ兵が、赤鬼のような裸身をさらして道路工事をしているのが見えた。遠くでは銃声が聞こえる。

夕刻になって、宮里さんと相談して米などを補充するため、昨日の濠に引き返してみた。濠に入ると、か細い声で「誰ですか？」という声がするので、大きな声で「誰だ」と誰何した。「中野です」と答えるので、マッチを擦って火をかざしてみた。みると爆破された昨日、通路の水溜りに倒れて唸り声を上げていた人であった。また水溜りに倒れ、口から泡を吹いていた女の人もいた。「歩ける

か？ 一緒に行くか？」と聞くと「連れて行ってください」と、二人は答えた。

宮里さんに相談してみた。しばらく、考えあぐねていたようだが、「一緒に行きますか」という返事が返ってきた。

四人で笹畑に来た。疲労状況を考えて分散して寝ることにした。夜が明けた。日が高くなると銃声が聞こえて来る。銃声は遠くに聞こえ、また、近くに聞こえる。今日の銃声は変だなあと思っている、ほんのわずか五〇メートル先をアメリカ兵が銃を構え、こちらに近づいて来ていた。半ば呆然としつつ驚いた私は笹畑を走りぬけ、崖を転がるように民家の跡地に跳び下りた。台風除けの石垣の上に枝を伸ばす大樹の陰に身を潜めた。

アメリカ兵が一人、こちらに回りこんでくるのが垣間見えた。こいつが大樹の周りをうろうろしていて離れようとしないう。「早く行け！ 早く行つてしまえ」と心の中で念じ続けた。その時間の長いこと。日が傾き始めた頃、ようやくアメリカ

兵は引き上げて行つた。音を立てずに長い息を吐いた。私は助かつたと思ひながら、あの三人は大丈夫だったかなと心配になった。

夕暮れになり、恐る恐る笹畑に戻ってみると、誰もいなかった。「やはり駄目か」と思い落胆していると、笹を揺るがすガサガサという音がして宮里さんが現れた。「おお、宮里さん無事でいてくれましたか」「ああ、満尾兵長殿が殺されていたら、私も死のうと思つていました」「いや俺もだ」とお互い手を握り締め涙を流しあつた。

しばらくして私は「あの二人は無事か」と尋ねると、「殺されています」との答えが返つてきた。宮里さんは私をそこに連れて行つた。中野といった男の方は頭を、女性の方は胸を撃たれて死んでいた。即死だろう。遺体はトタン張りの戸板に覆われていた。二つの遺体に手を合わせてこう思つた。私たちと一緒にここに来なければ殺されずに済んだかもしれないのに。また、休息の場所選びに配慮を欠いていたと後悔し、涙があふれた。持

参した米やマッチの類も、使い物にならないようにアメリカ兵により、撒き散らされていた。

再び宮里さんと二人きりになり、無言で歩き始めた。何時間か歩くと夜明けは早く、東の空が白味を帯びてきた。「今日の寝ぐらを探さねば」と探していると、上手にカモフラージュしているものの、濠を掘つた跡を見つけた。丹念に入り口を探すと、らしきものがあつた。しかし、人の出入りした形跡はない。なんとか身を滑り込ませて中に入つてみた。中は真つ暗闇で水が腹部あたりまで溜つていた。かまわず進んでいくと次第に水も少なくなり、微かだが人の声が聞こえる。しばらく進むと、現地沖繩の人たち三家族と十二、十三人位の日本兵がいた。挨拶をして「一緒に住まわせて頂けませんか」とお願いをした。返事は「この濠は定員いっぱいだ。出て行つてくれ」というものだった。「そうですか。わかりました。ここには沖繩の人達もおられるようですが、この宮里さ

んは現地入隊された沖縄の人です。どうかこの人だけでも置いてください。私は出て行きますから」と言って、この壕の人達が出入りする出口から壕の外に出た。

八十メートル位歩いた頃、私を追いかけて来る人がいた。「おい若いの、死ぬのはまだ早い。俺がみんなを説得するから俺について来い」と言われ、私は左腕を掴まれ壕に引き戻された。この人のお陰で一緒に住めるようになった。この人は岡山県出身の山根軍曹であった。

思えば米軍による沖縄の掃討戦で幾度かの危機を免れてきた。北から日本軍が再上陸してくるはずだ、来て欲しいとの夢を見て逃避行を続けてきた。私にとってこの壕が、苦しい戦場で平穏な日々が過ごせる最後の場所となった。この壕での生活は、夕闇迫る頃、やおら壕の外に出て弾痕に溜った水を汲み、涼を取り、用を足す人は用を済ませ、眼下にある米軍宿舎を眺め、明けの明星の出る頃

には、壕の中にもぐる。このパターンは他の壕と余りかわりはなかったが、この後の作業がこの壕の秘密を守ったのだ。

工兵隊出身の人達が足跡を丁寧にスコップで消す。涼をとった後も綺麗にその痕跡を残さず拭いて去る。そのやり方は徹底していた。その上みんなが壕に戻ったのを確かめると、出入り口には周辺と全く同じ草の土をのせた上蓋を中からのせて置くというやり方であった。壕の中は蒸し暑く、汗で後頭部が薄くなった。

三週間位経った頃、夕涼みや一連の秘密作業が終了した頃、「山・川」と日本軍の合言葉を発しながら四〇五人の人達が近付いてきた。何事ならんとみんなが固唾をのんで見守っていると、「日本は負けました。連合軍に降伏しました」と言って懐中電灯を取り出し、その灯かりを頼りに終戦の勅旨を読み上げ始めた。

「耐え難きを耐え、忍び難きを忍び」の一節は聞き取れたが、後は耳に入らなかった。ボー然と

していた。

みんなの意見は二つに分かれた。本当かもしれないが、敵の謀略説ではないかと。来た連中が我々に言った。「二人ほど軍使を出して下さい。色々とその証拠をお見せします。那覇港あたりを検分してもらって、本当の話だという確証を得ていただきます。明日夕また来ます」と言って彼らは帰って行った。

翌日夕刻、一行は二人を伴って戻って来た。ついて行った二人から「間違いありません。濠を出しましょう」との報告があった。

わずかな荷物を持って案内されたところは、八嘉の収容所だった。その日は九月二十四日であった。収容所は広大で、周囲三メートルくらいの鉄柵で囲われており、入り口は二重になっており、アメリカ憲兵隊(MP)が武装して警護していた。

持ち物・身体検査があり、貴重品は没収された。戦争捕虜を意味するPWマークが入った上下服をもらって中に入った。見物人が多数いた。私達の

汚い様を見てゲラゲラ笑っていた。何で今頃まで山にいたのかと奇異の目で見ると、知人がいるかもしれないと、見に来る人もいたようだ。

収容所は将校大隊、下士官大隊、兵大隊に区別されていた。私は下士官大隊の天幕に入れられた。天幕には比較的年齢の近い十五人程度の人が入っていた。私が入った天幕は、所謂特幹(特別幹部候補生)の人達が十人程おり、私の横で寝起きする富山県出身の浅野さんは、私より二歳上の十九歳であった。

この人達の任務は、沖縄本島の西対岸にある慶良間諸島に陣地を構え、ベニヤ張りの高速ボートに爆雷二個を積み、本島を取り囲んでいたアメリカの艦船に体当たりをするという、海の特攻隊であった。二回出撃を試みたらしい。が、その都度二、三艇に不具合が生じる。中途半端では秘密が暴かれるということで出撃は見合わされて、そうこうするうち一回も出撃することなく終戦になり、収容所に入ったそうである。

収容所の生活は単調で、朝、レーションという厚紙に入った食事が二食まとめて配給される。朝（ブレックファースト）昼（ランチ）夜（ディナー）三食一度に食べて寝る人もいた。単調な生活に飽きた人、体を動かしたい人は希望を出し、米軍の昼食付使役に出ていた。

十二月末に全員が集められた。季節外れの台風がまもなく直撃するので、準備して置くようにと伝達があった。そして台風はやって来た。風速四十五メートル級の台風であった。十五人全員が天幕の心棒を支えたが、自然の力には無力であった。収容所の天幕はすべて吹き飛ばされた。四十人程度の人が使用する簡易様式トイレの屋根も、グライダーのように吹き飛ばされた。

数日間は、その修復作業に追われた。ちょうどその頃、南大東島や離れ島の人達を積んだアメリカのリバティ船が那覇港に到着した。その人達と入れ替わりに私達は乗船させられた。その行く先

は誰も知らなかった。日本に帰れるのか？ グラム島辺りに連れて行かれるのか？ 疑心暗鬼であった。

ある朝、自動小銃の連続音が聞こえた。何事かと飛び起きて甲板に上ってみた。船を追いかけてくるイルカの群れにアメリカ兵が速射していた。何だ、そういうことかと独りつぶやきながらひとまず安心して船倉に戻った。

船が浦賀港に着岸した。船を降り本土の大地を踏みしめた時、初めて生きて還れたのかと思ひ、感無量であった。復員事務所で所定の手続きを済ませ、軍服一着と毛布一枚、帰郷旅費をもらい帰郷した。

誰も私の生存を信じる人がいないなか、ただ一人息子の生存を信じ信じてくれた母の喜んだ姿が、今も脳裏に焼きついている。

十五歳で志願し十八歳で復員した。以降、夜学で八年間、高校・大学を卒業し、社会人になって

もいろいろな変遷があった。七十五歳になった今日、半世紀も過ぎた沖繩戦の思い出は忘却の彼方へと流れていく。しかし自分たちの土地が、故郷が主戦場となり、親兄弟、子供たちを失うなど、大きな犠牲を払った。本土復帰三十二年になった今日になっても、沖繩の人達にはなおその傷跡は癒えることはないと思う。

私が生きて今日あるのも、こういう人達の尊い犠牲の上にある。そして戦場での命の恩人達。あの撤退する混乱の最中「満尾、そこを動くなよ。死ぬのは駄目だ。必ず迎えをやるからな」と言ってくれた弓取分隊長。「おーい若いの。死ぬのはまだ早い。俺がみんなを説得するから引き返せ」と言って、濠に引き戻して下さった岡山県出身の山根軍曹のご恩は決して忘れてはならないと決めている。そして死線を二人で潜り抜けた宮里さん。半世紀を過ぎ、十五歳から十八歳の記憶を辿りながら記述したもので、多少の誤謬はお許しの程お願いします。

石垣島 震洋特攻隊 戦記

滋賀県 西田 淳 男

私は、大正十二（一九二三）年十月二十八日、滋賀県栗東市小平井で生まれました。

昭和十八（一九四三）年五月一日、舞鶴海兵団入団。昭和二十年十二月、呉大竹港入港（駆逐艦）。同月十二日、故郷の実家へ帰り復員、と言うことで大東亜戦争に従軍出征した海軍軍人です。

私が軍人として御奉公に就いた当時の私の家は、水田八反で暮らす農家でした。家族は父母、弟（二人）妹（一人）と私の六人家族でした。

昭和も十八年となると、日本国中すべてを挙げて戦争一色となり、また最初は旗色の良かった戦況も次第に劣勢となり、制海、制空権も次第に敵の掌中に移り、国民全体が非常態勢でした。若い人は男女を問わず軍需産業に徴用され、ブラブラ